

## **妻を持ち、夫を持つとは？**

コリント人への手紙第一 7章 1-7節

### **はじめに**

コリント人への手紙第一を少しずつ読み進めてきて、今日から7章に入ります。この手紙は、使徒パウロがコリント教会に宛てた手紙ですが、6章まではパウロの耳に入って来たコリント教会の問題について、パウロが指導するという内容でした。例えば、信徒の間に仲間割れや妬みや争いがあるとか、不品行の罪に陥っている信徒がいるとか、そういう問題に対してパウロが指導するという内容でした。

7章からは、コリント教会からの質問にパウロが答えるという内容になっています。1節に「**あなたがたの手紙に書いてあったことについてですが**」とあるように、コリント教会はパウロに手紙を書いて、いくつかの信仰上の質問を送ったようです。例えば、クリスチャンは結婚するべきか独身でいるべきか、偶像にささげた肉を食べてよいかどうか、聖霊の賜物、特に異言で祈ってよいかどうか、復活は本当にあるのかどうか、などです。

7章以降は、パウロがこれらの質問に一つ一つ答えていくという内容になっています。そして今日から学ぶ7章全体は、結婚や独身の問題について書かれています。

### **1. コリント教会の独身主義、禁欲主義の影響**

コリント教会には、クリスチャンは独身でいるべきではないかと考える人たちがいたようです。そのような考え方の背景には、第一にイエス様が独身であったことが影響しているのではないかと思います。そして第二に、コリント教会を開拓したパウロ自身も独身であったことが影響していると思います。そして第三に、これが最も大きな影響を与えたと思いますが、当時のグノーシス主義の影響があったのではないかと思います。

グノーシス主義とは、人間の魂と体を分けて考えて、魂は良いもの清いもので、体は悪いもの汚れたものと考えます。そのため、男女の肉体関係や性的関係を汚れたもの罪深いものと考えたのです。男女の肉体関係や性的関係が汚れたもの罪深いものであるなら、結婚する意味などないのではないかと、クリスチャンは独身でいるべきではないかと考える人が出てきたのです。

またすでに結婚した夫婦であっても、男女の肉体関係や性的関係が汚れたもの罪深いものであるなら、夫婦の肉体関係や性的関係も避けるべきではないかと、クリスチャンの夫婦でも性に関して禁欲的になる人が出てきたのです。

このようなコリント教会の現状に対して、コリント教会は、クリスチャンは独身でいるべきか、夫婦であっても性に関して禁欲的であるべきかという質問をパウロに送ったので

す。

## 1. 結婚の意義

クリスチャンは独身でいるべきかという質問に対してパウロは、2節でこう答えます。「**しかし、不品行を避けるため、男はそれぞれ自分の妻を持ち、女もそれぞれ自分の夫を持ちなさい**」。

パウロは、独身でいることはある意味で危険だと言います。それは、5節にもあるように、私たちは自制力を欠いて、サタンの誘惑にかかって不品行に陥る危険性があるからです。性的欲求を抑えられずに不品行などの性的罪に陥るくらいなら、結婚しなさいと言うのです。

私たちはなぜ結婚するのでしょうか？結婚する目的は、大きく分けて四つあると思います。一つは、夫婦で助け合って生きるためです。神様は、「**人が、ひとりであるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう**」(創世記 1:18)と言われました。私たちは、夫婦で助け合い、補い合って生きるために結婚するのです。

二つ目は、子孫を増やすためです。神様は、「**生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ**」(創世記 1:28)と言われました。私たちは、子孫を増やし、神様が造られた世界を治め、文化を形成し、教会を形成していくために結婚するのです。

三つ目は、夫婦の関係を通して、キリストと教会との関係を証ししていくためです。妻は教会がキリストに従うように夫に従わなければなりません。また夫はキリストが教会を愛したように妻を愛さなければなりません。そうして、夫婦の関係を通してキリストの愛と教会の従順を人々に証ししていくために、私たちは結婚するのです。

四つ目は、今日の聖書箇所にあるように、不品行を避けるため、性的罪に陥らないためです。私たちは性的欲求を健全に扱うために、結婚することが大切なのです。

## 2. 夫婦の平等性

続いてパウロは、夫婦であっても性に関して禁欲的であるべきかという質問に対して、3-5節でこう答えます。「**夫は自分の妻に対して義務を果たし、同様に妻も自分の夫に対して義務を果たしなさい。妻は自分のからだに関する権利を持っておらず、それは夫のもので。同様に夫も自分のからだについての権利を持っておらず、それは妻のもので。互いの権利を奪い取っては いけません**」。

ここには、夫も妻もお互いに義務を果たさなければならない、夫婦は、お互いに自分のからだの権利を持っておらず、それは相手のものである、夫婦はお互いに肉体関係や性的関係を拒んではならない、ということが書かれています。

それと同時に、ここには夫婦の平等性が書かれています。ここには、妻だけが夫に義務を果たせとか、妻のからだだけが夫のものだとは言われていません。夫も妻も互いに義務を果たし、夫も妻も互いに自分のからだの権利を持っていないと言われています。

夫婦というのは、お互いに平等であるべきです。お互いに尊厳が守られるべきです。しかし夫婦には、役割に違いがあり、神様が定めた秩序があります。夫は妻のかしらであり、妻を愛する義務があります。逆に妻は夫の助け手であり、夫に従う義務があります。そして子どもには、親を敬う義務があり、親は子どもを主の教育と訓戒によって育てる義務があります。私たちは、神様が定めた夫婦と家庭の秩序を守りつつ、お互いの尊厳を守っていくことが大切なのです。

### **3. 夫婦は自分のからだの権利を持たない**

さて、結婚した夫婦は、自分のからだの権利を放棄しなければなりません。他の聖書の翻訳では、夫婦は「自分のからだを自由にはできない」と訳されています。結婚した夫婦は、相手に自分のからだを自由にはできず、相手に与えなければならないのです。5節の「互いの権利を奪い取ってははいけません」という言葉は、他の聖書の翻訳では、「互いに相手を拒んでははいけません」と訳されています。

結婚するということは、自分のからだの権利を放棄して、相手に自分のからだを与えることなのです。しかし現代では、夫婦間のDVやハラスメントの問題がありますので、この言葉が曲解されて受け取られる危険性もありますが、基本的には夫婦は、自分のからだを相手に与えなければなりません。

しかし私たちクリスチャンは、結婚相手に自分のからだを与える前に、まず神様に自分のからだを献げなければなりません。私たちのからだは、「聖霊の宮」です。イエス様が、自分の命という代価を払って、私たちのからだは神様のものとされたものです。私たちのからだは、結婚相手のものである前に神様のものです。私たちのからだは、神様の栄光のために使わなければなりません。

### **4. 夫婦関係の中心は祈り**

夫婦は、自分のからだの権利を持っていません。しかし一つだけ、自分のからだの権利を主張できる例外があります。それは、5節にあるように、「**祈りに専念するため**」です。夫婦は、祈りに専念したい時には、自分のからだの権利を主張できるのです。

5節に「祈りに専念するために、合意の上でしばらく離れていて、また再びいっしょになるというのならかまいません」とありますが、これは、祈りに専念するために、夫婦は別居をしてよいということではありません。そうではなくて、祈りに専念するために、お互い合意の上で一時的に、肉体関係や性的関係を控えるということです。

このことから教えられることは、夫婦関係において第一にするべきことは、肉体関係や性的関係ではなく、「祈り」であるということです。ペテロも、このように言っています。「**夫たちよ。妻が女性であって、自分よりも弱い器だということをわきまえて妻とともに生活し、いのちの恵みとともに受け継ぐ者として尊敬しなさい。それは、あなたがたの祈りが妨げられないためです**」(1ペテロ3:7)。夫婦関係において、祈りが妨げられるようなことは何であっても避けな

ければならない、祈りこそ最優先にすべきことだということです。

祈りを最優先にすべきだということは、神様との関係を最優先にすべきだということです。夫婦は、お互いの関係よりも、神様との関係を大切に、優先していくことが大切です。

聖書に、「**わたしの家は祈りの家と呼ばれる**」(マタイ 21:12)という言葉があります。私たちの家庭は、まず第一に「祈りの家」でなければなりません。私たちの家庭に祈りの声があふれるようにしなければなりません。夫婦でぜひ祈りましょう。子どもたちに祈りを教えましょう。もし家庭の中で、自分だけがクリスチャンであるならば、自分ひとりで祈りを始めましょう。そして家族のために祈りましょう。神様はきっと、私たちひとりひとりの「祈りの家」を祝福してくださるでしょう。

## 5. 独身も結婚も神の賜物

最後に、パウロは7節で「**しかし、ひとりひとり神から与えられたそれぞれの賜物を持っているので、人それぞれに行き方があります**」と言っています。

パウロ自身は独身でした。そして同じ7節で、「**私の願うところは、すべての人が私のようにあることです**」と言っています。パウロ自身は独身を勧めています。独身だと、どうしたら神様に喜ばれるかということに集中しますが、結婚すると、どうしたら妻や夫に喜ばれるかということも考えるようになり、心が神様に集中できなくなるからだと言っています。

しかしパウロは、結婚することも独身でいることも、神様の賜物によるのだと言います。イエス様は独身でいることについて、このように言われました。「**母の胎内から、そのように生まれついた独身者がいます。また、人から独身者にさせられた者もいます。また、天の御国のために、自分から独身者になった者もいるからです。それができる者はそれを受け入れなさい**」(マタイ 19:12)。イエス様によれば、独身でいることには三つの可能性があると言います。一つは、生まれつき独身者として生まれた人です、二つ目は、妻や夫が死別した人、正当な理由で離婚した人です、三つ目は、神様に仕えるためにあえて結婚しない人です。

結婚することも、独身でいることも神様の賜物です。世間は、結婚した人は勝組で、独身の人は負組と見られますが、聖書は結婚も独身も賜物と捉え、どちらかに優劣があるとは見ません。不品行の誘惑を避けて結婚し、家庭を形成することも素晴らしいことですが、神様に喜ばれることを絶えず考えて独身でいることも素晴らしいことです。大切なことは、結婚も独身も賜物と受け止めて、その賜物に忠実に生きて、人と比べたり妬んだりすることなく、その賜物を感謝して喜んで生きるということではないでしょうか。

## おわりに

私たちには祈りがあります。神様との関係があります。結婚していようが、独身でいようが、私たちにとって最優先にしなければならない関係は、神様との関係であり、祈りです。

私たちにとって大切なことは、私たちの家を「祈りの家」としていくことです。